

学術論文の文末表現に関する一考察

－「形態」に注目して－

趙宣映*・趙南星**

(e-mail : sy218@pcu.ac.kr* ・ chons@hanbat.ac.kr**)

目 次

- | | |
|-----------------------|-------------------|
| 1. はじめに | |
| 2. 研究方法 | |
| 2.1 分析対象 | 2.2 分析方法 |
| 3. 文末表現の概観 | |
| 3.1 [はじめに]の文末表現 | 3.2 [おわりに]の文末表現 |
| 3.3 [はじめに]と[おわりに]との比較 | |
| 4. 文末表現の詳細 | |
| 4.1 「～である」 | 4.2 「～る形」(動詞の基本形) |
| 4.3 「～ている」 | 4.4 「～れる/られる」 |
| 4.5 「～た」 | |
| 5. おわりに | |
-

1. はじめに

従来、文末表現の「である」と「だ」はそれぞれ文章体と口語体として使い分けられるとされている。しかし、実際の文章においては、文末において「である」と「だ」が混用される場合も少なくない。卓(2002)は、新聞の文章の文末表現を考察した結果、報道文やコラムでは「だ」が「である」より多く使われており、社説では「である」が多く使われているとしている。

一方、論理的な展開を要する学術論文などにおいては、「だ」より「である」が多く使

* 培材大学 教養教育支援センター, 専任講師, 日本語表現及び文体

** ハンバット大学 日本語科, 教授, 日本語学

われると予想される。実際、卓(2002)の調査では、学術論文の文末表現において「だ」は一例も使われず、「である」のみが使われているとする。ここで、文章体としての「である」の性質を確認している。

ところで、学術論文の文末表現では「である」より「動詞(基本型)」や「その他(ない、(ら)れる、(さ)せる、たい、ようだ、そっだ、(よ)う、か)」が多く使われているとする(卓、2002)。学術論文においては「その他」としている後者の表現が、興味深い文末表現になると言えよう。卓も、そのうち「られない」「られる」「だろうか(特に、「ではないだろうか」)」などを学術論文における文体の特徴として挙げている。

本稿は、このような「形態」に注目して文末表現を考察し、学術論文にはどのような文末表現が多く使われているのかを分析し、その特徴を明らかにしたい。例えば、「と言える」の類似の表現として、「と言えよう」も、「と言えるのではないか」も使われているのである。論文を書いたことのある人なら、どの表現を使った方がいいのかと悩んだ経験があると思う。本稿では、メインの動詞に付加されるいろいろな形に注目しようとする。

この際に分析対象にするのは、学術論文の文体の特徴がより鮮明に現れると思われる、「はじめに」、「序」などの導入部分や「おわりに」、「結」などの締めくくる部分の文末表現である。卓(2002)の場合、論文の全体の文を考察したため、全体像がわかり、示唆される点も多い。ただ、それぞれの論文の目的によってより多く使われる表現は異なっており、論文ごとの表現の差に気を使わざるを得なかった。ところが、論文の「はじめに」や「おわりに」における文末表現にはある程度の共通性が認められる。実際、論文の作成にあたって、文末表現に一番気をつかう部分は、「はじめに」や「おわりに」ではないだろうか。そこで本稿では、学術論文の「はじめに」、「序」などの導入の章と「おわりに」、「まとめ」などの締めくくりにおける文末表現を文末の形態に注目しながら考察していくことにする。また、導入と締めくくりにおいては、その文末表現に違いがあると考えられ、両部分での表現の比較も行ってみたい。

このような分析をとおして、論理的な文章の様々な例を示すことは、さらに作文教育にも役に立つだろう。従来、論理的な文章を書く練習は文体や文の流れなどに注目してきたが、このような表現の例を与えることも、文章の作成に役に立てるだろうと期待するのである。

2. 研究方法

2.1 分析対象

学術論文の「はじめに」などの導入する章や「おわりに」などの締めくくる章における文末表現を考察するために、「日本語学論説資料(2005)」の「文法」編における学術論

文30篇を分析対象とした。「日本語学論説資料」には様々な学術誌からの論文が集められており、特定の学術誌の特性は排除できると思ったのである。そのなかでも、より文章に敏感である「文法」に関する論文を対象にした。また、「はじめに」や「序」のように導入を明確に示している論文や「おわりに」や「まとめ」のように締めくくりであることを明示している論文のみを対象にした。各々の論文の章の命名は以下のものである。()に示したのは、頻度である。

導入：はじめに(28)、始めに(1)、本稿の課題(1)

締めくくり：おわりに(11)、まとめ(9)、まとめと今後の課題(5)、結論(2)

おわりにかえて(1)、結語(1)、今後の課題(1)

上記のように、導入の章は「はじめに」が圧倒的に多く、締めくくる章は「おわりに」が「まとめ」よりわずかではあるが多かったため、以下それぞれの章を代表して[はじめに]、[おわりに]と記すことにする。

本稿で分析対象にした論文の概要は以下の<表1>に示す。

<表1>を見ると、本稿で対象にした[はじめに]の文は290文、[おわりに]の文は253文あり、分析した文は総じて543文である。平均すると、一つの論文に[はじめに]には約10文、[おわりに]には約8文あることになるが、論文によっては[はじめに]に1文しかない論文(No.29)もあれば、31文ある論文(No.16)もある。[おわりに]にも、2文しかない論文(No.3、9、14)もあれば、28文ある論文(No.20)もある。論文の[はじめに]と[おわりに]とを合わせると、5文ある論文(No.14、29)もあれば、49文ある論文(No.16)もあることになる。

<表1> 分析した論文の概要(文の数)

論文番号	[はじめに]	[おわりに]	小計	論文番号	[はじめに]	[おわりに]	小計
1	12	12	24	16	31	18	49
2	5	7	12'	17	7	5	12
3	8	2	10	18	8	6	14
4	14	5	19	19	7	4	11
5	12	15	27	20	12	28	40
6	5	4	9	21	4	14	18
7	9	7	16	22	17	12	29
8	13	5	18	23	8	8	16
9	12	2	14	24	2	10	12
10	10	8	18	25	14	6	20

11	12	6	18	26	6	4	10
12	12	20	32	27	7	9	16
13	19	4	23	28	4	3	7
14	3	2	5	29	1	4	5
15	7	19	26	30	9	4	13
小計	153	118	271	小計	137	135	272

2. 2 分析方法

卓(2002)は、文末表現の分析のために以下のような分類項目を設けている¹⁾。

- (1)「た」系列：入れた、論じられた、あった、であった
- (2)動詞の[る]形：ある、みる、する、ことができる、いえる
- (3)動詞＋補助動詞：～ている、～てある、～てみる、～ておく
- (4)その他(否定、受身、可能、自発、使役、推量、推定、希望、疑問の要素を含んでいる表現)：言えない、思われる、認められない、考えさせる、考えてみたい、挙げよう、どうだろうか、自然であろうか
- (5)い形容詞：ない、高い、多い
- (6)補助形容詞：解釈されやすい、考えにくい、高くない
- (7)である：な形容詞、名詞＋である、形式名詞＋である、～ようである、～そうである

上記の分類項目を以て学術論文の文末表現の全体的な分布を見た結果、一番多かったのは「動詞の[る]形(30.6%)」であり、次は「その他(27.3%)」、「である(19.4%)」、「動詞＋補助動詞(10.9%)」の順であった(卓, 2002)。

ここで、「その他」としている表現の割合が2番目に多いことから、「その他」にはどのような表現があるのか気になるところである。また、「である」の前に来る表現も多様であり、どのような表現が多いのかも調べてみたい。卓は、新聞の文章などを考察するときの項目を用いているため、学術論文の文章の特徴をつかむためには適切ではない側面がありえらと思われる。

本稿では、学術論文の表現の特徴をより鮮明にとらえるために、まず文末表現をできるだけ細分して分析した。文末表現のメインの動詞に付加されている表現、つまりメイン動詞を除外した形態を全部分析対象とした。たとえば、「～た」に分類されるのは「動詞+た」のみにし、「～てきた」「～であった」などは、別の項目として扱ったのである。詳しい項目は、次の章の分析結果から確認できる。

1) 各々の分類項目における例示はすべて卓(2002)からそのまま引用したものである。

3. 文末表現の概観

3.1 [はじめに]の文末表現

〈表2〉では、まず[はじめに]に現れる文末表現の概略がわかるように、30編の論文での出現回数の多い順に提示した。また、特定の文末表現が特定の学術論文に片寄っているのではないかをみるために、つまり一つの文末表現が一人の論文作成者の好みであるかどうかを判断するため、それぞれの表現が現れた論文の数や一つの論文における出現回数の中で一番多く現れた回数(最多出現回数)も示した。さらに、[おわりに]における出現回数と比較できるように、それぞれの表現の[おわりに]における出現順番も一緒に示した。

〈表2〉からわかるように、[はじめに]に多く現れる文末表現は「動詞の基本型」「～である」「～ている」であり、この3つの表現の出現率が全体の50%を超える。続く4位から8位までをみると、「～た」「～がある」「れる/られる」「～たい」「～ない」の順である。[おわりに]における出現順番と比較してみると、8位内に入っている表現は変わらないので、多く使われている表現は類似していると言えるだろう。しかし、その出現回数や出現率は両方において異なることに注目したい。たとえば「れる/られる」は[はじめに]では6番目に多く現れる表現であるが、[おわりに]では2番目に多く現れる表現である。一方、出現回数は少ない(5回)ものの、「～か」は[おわりに]には1回も現れていない。文末表現の出現率の比較は、〈表3〉の[おわりに]についての分析のあとに、〈表4〉でまとめることにする。

〈表2〉 [はじめに]の文末表現

文末表現	出現回数	出現率 (%)	出現論文数	最多出現回数*	出現順番	[おわりに]の出現順番
動詞の基本型	53	(18.3)	21	7	1	3
～である	52	(17.9)	22	9	2	1
～ている	41	(14.1)	20	6	3	5
～た	17	(5.9)	12	3	4	4
～がある	17	(5.9)	9	4	5	7
れる/られる	15	(5.2)	9	4	6	2
～たい	14	(4.8)	11	2	7	8
～ない	11	(3.8)	8	2	8	6
～とする	9	(3.1)	9	1	9	その他
形容詞	6	(2.1)	6	1	10	11

～(こと)になる	5	(1.7)	5	1	11	12
～であろう	5	(1.7)	4	2	12	その他
～か	5	(1.7)	4	2	13	-**
～(こと)にする ²⁾	4	(1.4)	4	1	14	その他
～となる	4	(1.4)	3	2	15	15
その他 ³⁾	32	(11.0)				
合計	290	(100 ⁴⁾)				

*一つの論文に一番多く出現した回数である。

**[おわりに]には出現しないことを示す。

3. 2 [おわりに]の文末表現

<表3>には [おわりに] の文末表現を、[はじめに]と同じく、30篇の論文での出現回数の多い順に提示した。

<表3> [おわりに]の文末表現

文末表現	出現回数	出現率 (%)	出現論文数	最多出現回数*	出現順番	[はじめに]の出現順番
～である	46	(18.2)	16	8	1	2
れる/られる	34	(13.4)	15	5	2	6
動詞の基本型	26	(10.3)	13	4	3	1
～た	23	(9.1)	16	4	4	4
～ている	21	(8.3)	9	6	5	3
～ない	16	(6.3)	10	3	6	8
～がある	13	(5.1)	9	3	7	5
たい	12	(4.7)	11	2	8	7
～てきた	11	(4.4)	10	2	9	その他

2) [はじめに]では「～ことにする」と現れるが、[おわりに]では「～にする」になる。

3) 「その他」の文末表現には、次のような表現があった(括弧内の数字は、出現回数であり、その順に示す)。～であろうか(3)、～ではあるまいか(3)、～こともある(3)、～ことができる(3)、～していく(3)、～よう(3)、～てくる(2)、～だろう(1)、～となろう(1)、～とある(1)、～ことによる(1)、～ことにある(1)、～とされる(1)、～てみる(1)、～こと(1)、～であった(1)、～てきた(1)、～であるとした(1)、～ことにした(1)。

4) それぞれ、小数第2位で四捨五入したため、正確には個別の値の合計は100にならないが、合計の290文を100%にしたという意味である。

5) 「その他」の文末表現には、次のような表現があった(括弧内の数字は、出現回数であり、その順に示す)。～よ

～であった	5	(2.0)	3	3	10	その他
形容詞	4	(1.6)	4	1	11	10
～になる	4	(1.6)	3	2	12	11
～があらう	4	(1.6)	2	3	13	-**
～だろうか	4	(1.6)	2	2	14	-**
となる	3	(1.2)	3	1	15	15
その他 ⁵⁾	27	(10.7)				
合計	253	(100 ⁶⁾)				

*一つの論文に一番多く出現した回数である。

**[はじめに]には出現しないことを示す。

<表3>からわかるように、[おわりに]に多く使われている文末表現は、「～である」「れる/られる」「動詞の基本型」「～た」であり、この4つの表現の出現率をあわせると50%を越えることになる。次に多いのは、「～ている」「～ない」「～がある」「～たい」である。一方「～があらう」「～だろうか」の場合、[おわりに]には4回ずつ現れているが、[はじめに]には1回もない。

3.3 [はじめに]と[おわりに]との比較

以上では、[はじめに]と[おわりに]とのそれぞれの文末表現の出現率や出現順番などを概観してみた。次に、両方の文末表現の出現回数をあわせた合計と出現率を上位8位まで提示してみると<表4>のようになる。ここで、両方の文末表現の出現率にどのような違いがあるのかを比較しやすくするために、8位までの表現の出現回数と出現率を<表2>と<表3>から抜粋して<表4>にもう一度示した。

<表4> 上位8位までの文末表現の出現率の比較

出現回数/ 比率 文末表現	合計		[はじめに]		[おわりに]	
	出現回数	出現率* (%)	出現回数	出現率 (%)	出現回数	出現率 (%)

う(3)、～ていた(2)、～とある(2)、～だろう(2)、～にある(2)、～であらう(2)、～できる(2)、～であらうか(1)、～にならう(1)、～にする(1)、～こと(1)、～ことによる(1)、～とする(1)、～ていった(1)、～てみた(1)、～ことができなかった(1)、～ことはなかった(1)、～ものもあった(1)、～になった(1)

6) それぞれ、小数第2位で四捨五入したため、正確には個別の値の合計は100にならないが、合計の253を100%にしたという意味である。

～である	98	(18.1)	52	(17.9)	46	(18.2)
動詞の基本型	79	(14.6)	53	(18.3)	26	(10.3)
～ている	62	(11.4)	41	(14.1)	21	(8.3)
れる/られる	49	(9.0)	15	(5.2)	34	(13.4)
～た	41	(7.6)	17	(5.9)	23	(9.1)
～がある	30	(5.5)	17	(5.9)	13	(5.1)
～たい	26	(4.8)	14	(4.8)	12	(4.7)
～ない	27	(5.0)	11	(3.8)	16	(6.3)

*合計の出現率は、[はじめに]と[おわりに]の総表現数(543)を基にした比率である。

<表4>から、[はじめに]と[おわりに]との両方をあわせてもっとも多く現れる表現は、「～である」であり、従来の考察でも言われているように、学術論文において「である」は欠かせない表現であることがいえよう。ただ、[はじめに]と[おわりに]において、その出現率は20%を越えないので、序論でも述べたように、学術論文の文末表現として、「～である」以外の表現にも目を向けるべきである。

本稿では、両方の合計からみて、2位から5位の表現である「動詞の基本型」「～ている」「れる/られる」「～た」に注目してみたい。興味深いことは、このなかでは、「動詞の基本型」と「～ている」のように、[はじめに]により多く現れる表現があれば、「れる/られる」と「～た」のように、[おわりに]により多く現れる表現があるという点である。この4つの表現のなかで、「～た」の場合は、[おわりに]に多く使われると予想できる表現である。[おわりに]では、研究の結果などを過去形で表現することが多いからである。しかし、出現率を比較してみると、[はじめに]にも少なからずの「～た」があり(両方の出現率の差は、3%弱である)、[おわりに]のなかでの「～た」の出現率は4位に留まっている。これは、一つには、「～た」として分類されている表現が、純粋に「動詞+た」であることに起因すると考えられる。いいかえれば、<表3>の出現順番が9位と10位の「～てきた」「であった」は、末尾に「～た」はあるが、より詳しく表現の特徴を考察するために別の表現として扱ったためである。また、<注5>に示した「その他」の表現のなかにある、「～ていた(2)、～ていった(1)、ことができなかった(1)、～ことはなかった(1)、～ものもあった(1)、～になった(1)」も全部合わせると、23例あることになる。やはり、過去形の「～た」が少なくはないことがわかる。そこで「動詞+た」だけでなく「～た」が末尾にある表現を全部合わせてみたが、20%に至らないのであり、先ほどの「～である」の出現率ぐらいである。文末表現として「～た」が少なくはないものの、[おわりに]を支配する表現であるとはいえないだろう。

これまで、学術論文の[はじめに]と[おわりに]とで、多く使われている表現について概観し

た。ところが、序論でも述べたように、たとえば「～である」でもその前に接続されている表現は多様であり、文末表現の特徴を言及するためには一番最後の表現のみではなく、その前の表現までを視野にいれるべきだと思う。

そこで、[はじめに]と[おわりに]との両方で多く使われている「～である」および、「動詞の基本型」「～ている」「れる/られる」「～た」について、それぞれの前にどのような表現が接続されているかを詳しく見ていくことにする。このような具体的な考察は、作文教育などに大いに役に立つと思われるからである。

4. 文末表現の詳細

文末表現の範囲を広げて、それぞれにどのような表現が接続されているのか、また、[はじめに]と[おわりに]において、どんな違いがあるのかを比較してみた。

4.1 「～である」

「～である」の前に接続している表現のなかで、[はじめに]と[おわりに]との両方合わせて5例以上出現している表現には、「 」、もの、の、こと、問題/点/用法、様(よう)⁷⁾、通(とお)り、可能、わけ、はずなどがある。

1) 「 」+である

[はじめに：14例(27.0%)⁸⁾] ①…研究対象としているのはその白点である。

②…側が～動詞である。 ③…単純動詞「生く」である。

[おわりに：13例(28.3%)] ①…次のような区分である

②…が主流である ③…「な……そ」である

両方の例③では「である」の前に「 」で示しているように、他の表現も「 」でくれるような固有名詞や表現が前にくる場合である。[はじめに]の場合は、例①や③のように研究対象などを言及する場合もあれば、例②のように論を展開するための説明の場合もある。

2)もの+である

[はじめに：13例(25.0%)] ①…考察するものである ②…目的とするものである

③…検討しようとするものである

7) 表現によっては、「様」や「よう」のように、漢字にしている場合もあれば、ひらがなにしている場合もある。これは、異なる表現としてカウントしていないが、二通りの表現があったことを「様(よう)」のように示す。以下同様。

8) 比率は、[はじめに]または、[おわりに]における、それぞれの表現の出現回数のなかでの比率である。つまり、この場合、[はじめに]の「～である」の出現回数が52例なので、(14÷52)*100の値である。以下同様。

[おわりに：3例(6.5%)] ①…起こしてしまうものである

②…ことになるというものである ③…中核を担うものである

形式名詞の「もの」が前にくる場合であるが、その「もの」の前にくる形態もまた様々である。[はじめに]では、例①のように動詞(する、した、ていく、られる)に直接接続した「もの」(5例)もあれば、例②のように「名詞+とする」「名詞+という」「な形容詞」に接続する「もの」もある。[おわりに]においては、3例しかないものの、全部「動詞+ものである」である。

3)の+である

[はじめに：0例]

[おわりに：6例(13.0%)] ①…形成することとなるのである ②…思われるのである

③…とらえられているのである

[はじめに]では、一例も見られず、[おわりに]に6例もあることと対比できる。「～のである」は、ある事柄について説明をするというニュアンスがあるので、研究結果について分析や解釈を加えるときに使われていると思われる。

4)こと+である

[はじめに：4例(7.7%)] ①…並べ直すことである ②…と言(い)うことである

[おわりに：3例(6.5%)] ①…することである ②…することである

③…かことである

[はじめに]の例①を除く3例は、例②と同じ「いうことである」であり、この文末表現は「である」でも「ことである」でもなく、「いうことである」という表現と認識し、実際の作文教育などでもひとまとまりの表現として使えるように指導したほうが良いと思われる。[おわりに]でも2例は、「いうことである」の形である。

5)問題/点/用法+である

[はじめに：11例(21.2%)] ①…本稿の問題設定である

②…があるという点である ③…共起する用法である

[おわりに：2例(4.3%)] ①…かといった問題である ②…が問題である

問題であることを述べる時の一番簡単な表現であると言えよう⁹⁾。

6)様(よう)+である

[はじめに：3例(5.8%)] ①…ないようである ②…なかった様である

9) 他にも「問題を含んでいる」「問題となる」のような表現がある。このような考察は別稿を待ちたい。

③…なされていないようである

[おわりに]:0例]

[はじめに]の3つの例で注目したいのは、「ようである」の前に、「ない、なかった、ていない」のように否定形がくるということである。否定する場合、あまり強くないように「ようである」のような表現が必要であると言えるだろう。[おわりに]では、例がない。

7)通(とお)り+である

[はじめに]:3例(5.8%)] ①…次の通りである ②…以下の通りである

[おわりに]:2例(4.4%)] ①…次の通りである ②…以下のとおりでである

両方とも「通りである」の前に「以下の」または「次の」という表現が来るので、この表現も決まった表現として覚えるべきであろう¹⁰⁾。

8)はず+である

[はじめに]:0例]

[おわりに]:5例(10.9%)] ①…になるはずである ②…感じるはずである

③…いるはずである

[はじめに]は1例もなく、[おわりに]にのみ5例見られたが、実は、この表現は同じ論文(No.20)に5例現れているので、これは個人の好む表現であると言うべきであろう。

9)その他、2例ずつある表現

[はじめに]:可能+である

[おわりに]:わけ+である、べき+である、予定+である

10)その他、1例ずつある表現

[はじめに]:わけ+である、から+である

[おわりに]:可能+である、から+である、必要+である、まま+である、ところ+である、ゆえん+である

このような表現は、用例数は少ないものの、「～である」と一緒に現われる表現として、おぼえておく必要があるだろう。

4. 2. 「～る形」(動詞の基本形)

動詞の基本型においては、特別な形態が接続されているわけではないが、一部の動詞

10) [はじめに]と[おわりに]とで現われた用例数は少ないが、論文の「本論」の中にはより多く使われると思われるからである。

には前にくる表現に興味深い点がある。また、論文によく使われている動詞があると思われるので¹¹⁾、ここでも、どのような動詞が使われているかを中心に概観することにする。

1) 思う

[はじめに：5例(9.4%)] ①…有意義だと思う ②…卑見を記そうと思う
③…憶測を述べようと思う ④…について考えてみようと思う
⑤…立場を明確に示したいと思う

[おわりに：4例(15.4%)] ①…構想していこうと思う ②…することができたかと思う
③…制約があると思う ④…問題があると思う

[はじめに]では、これから述べることについての断り(卑見、憶測など)を含めたりしながら、「～と」+「思う」の形態で現れている。[おわりに]でも全例において、「～と思う」になっている。このような引用の「と」は、「う/よう+と思う」の場合は筆者の意図や試みなどを表すことになり、「と+思う」は筆者の意見を表すことになるので、作文教育において注意すべき点である。

2) 考える

[はじめに：2例(3.8%)] ①…明瞭になると考える ②…統一的に捉えて考える

[おわりに：1例(3.9%)] ①…ものと考え

「思う」に比べ、「考える」の出現は少なく、これは次節の「思われる」と[考えられる]でも同じ傾向が見られる。韓国語話者の場合、この使い分けは難しいと思うので、このような出現傾向に注目させたい。

3) 考察するの類

[はじめに：4例(7.6%)] ①…について考察する ②…再考を試みる
③…考察を進める

[おわりに：0例]

[はじめに]において、①の「考察する」の他に②、③のような「考察」の意味として使われている表現もみられた。このような意味の類似している表現については別の機会にふれたいと思うので、ここでは例示することにとどめる。

4) 述べる

[はじめに：3例(5.7%)] ①…ことを述べる

[おわりに：1例(3.9%)] ①…について述べる

11) 卓(2002)も学術論文に使われる動詞の種類は限られているという。

5)現れるの類

[はじめに：4例(7.6%)] ①…に現れる ②…にも出現する

[おわりに：0例]

[はじめに]でのみ、「出現する」は3例あるが、同じ論文の用例である。

6)その他、2例ずつある動詞

[はじめに]：言(い)う、示す、指摘する、(分析/分類)を行う

[おわりに]：表す、受ける

7)その他、1例ずつある動詞

[はじめに] 言える、呼ぶ、挙げる、取り上げる、承ける、提示する、あらわせる、(問題を)提起する、(疑問が)起こる、論じる、議論する、論証する、展望する、示唆する、仮定する、用いる、存在する、整理しておく、わかる、起こす、遡る、立つ、立ち戻る、とる、なる、検討する、(検討を)加える、

[おわりに] 呈す、成り立つ、持つ、及ぼす、達する、生じる、形成する、累加する、起因する、該当する、異なる、再掲する、いたる、潜在する、ふれる、うかがえる

このような動詞は、学術論文に使われる基本動詞として覚えておくべきだろう。日常ではあまり使われない動詞も多々あるので、特に注意しておく必要がある。

4. 3. 「～ている」

1)～られている

[はじめに：13例(31.7%)] ①…考えられている ②…ことが述べられている

③…方向が示されている

[おわりに：4例(19.1%)] ①…がなされている ②…使われている

③…形成されている

「～ている」という文末表現のなかで、[はじめに]の32%弱、[おわりに]の19%が「～られている」という形になっていることは興味深い。これは、文末表現として「～ている」のみを挙げている場合には見逃せることであろう。次節の「れる/られる」表現とともに、このような表現も注意しておくべきである。「～られている」が好まれる理由としては、「～している」と比べれば、誰かの作用であるのかを問わないという側面があるので¹²⁾、論文の表現に適したと言えよう。

2)～としている

[はじめに：6例(14.6%)] ①…ことを目的としている ②…本旨としている

12) 例えば、加藤泰彦、福地務(1989)『テンス・アスペクト・ムード』荒竹出版、p.53

③…であるとしている

[おわりに：0例]

[はじめに]にのみに現われている表現であるが、「目的」を述べる時などに使われる表現として、文末表現の単純さを避けるために使われているといえよう。

3)その他、両方合わせて5例以下の表現

～となっている([はじめに]のみ3例)、～て来(き)ている([はじめに]のみ2例)

4)その他、1例ずつある動詞

動詞のテ形に直接「ている」がくる形である。

[はじめに] 考えている、異なっている、示している、揚げている、述べている、指摘している、いっている、有している、なしている、もっている、わかっている、扱っている、決まっている、提案している、出て居る、含んでいる

[おわりに] 考えている、異なっている、示している、挙げている、示唆している、入れ代わっている、企図している、主張している、になっている、よくなっている、感じ取っている、持っている、認識している、分類している、握っている、影響している、

このような表現も学術論文によく使われる表現のリストに入るだろう。また、ゴシックにしている表現は[はじめに]と[おわりに]の両方で使われているので、注目すべきである。

4. 4. れる/られる

1)思われる

[はじめに：3例(20.0%)] ①…と思われる ②…していないように思われる

③…なされていないように思われる

[おわりに：9例(26.5%)] ①…であるように思われる ②…ではないように思われる

③…必要と思われる

学術論文の「れる/られる」表現と言えば、やはり「思われる」が浮かぶだろう。論文におけるこのような受身形は、自発と解釈される傾向がある¹³⁾。自発表現が論文に好まれるのは、「自然にそう思えるということで、断定を避け、必然性を高めることができる¹⁴⁾」ためであるといわれている。また、その前に来る表現は、「～と」もあれば、「～ように」特に「～ないように」が多いことがわかる。自発表現である「思われる」は「思う」よりいわゆる婉曲表現の一種として考えられるが、さらに「ように」や「ないように」が接続することによって、より婉曲な表現を作っている。

13) たとえば、石黒圭(2007)『文章表現の技術V—文体編』明治書院、p.238

14) 注13に同じ。

2)考えられる

[はじめに：0例]

[おわりに：10例(29.4%)] ①…対応が考えられる ②…ものと考えられる
③…であると考えられる

[考えられる]は[はじめに]には1例もなく、[おわりに]のみに現われている。これは、「思われる」と「考えられる」の使い分けを分析する際に示唆する点がある。

3)見られる

[はじめに：4例(26.7%)] ①…で見られる ②…傾向が見られる
③…例も見られる

[おわりに：0例]

4)その他、2例ある動詞

[はじめに] 感じられる

[おわりに] とらえられる、行(おこな)われる

5)その他、1例ある動詞

[はじめに] 言われる、限られる、与えられる(4例あるが、一つの論文の用例である)

[おわりに] 結ばれる、予想される、限られる、判断される、表出される、引き起こされる、あげられる、提起される、まとめられる、感じられる、推測される

このような表現も、受身形として使われる表現として注意して見ておきたい。「思われる」「みられる」「感じられる」など、感情や思考の表現の受身形が主に自発表現とされているが、ここに挙げられている表現の多くも自発表現であると見なすことができよう。

4. 5. 「～た」

前述したように、「～た」は「～てきた」「～てみた」「であった」などを除いているのでその例は多くないが、婉曲表現が好まれる中で、このように断定形が使われることにもかえって注目した方がいだろう。

1)～られた

[はじめに：2例(11.8%)] ①…9例見受けられた ②…三例、見受けられた

[おわりに：5例(21.7%)] ①…みられた¹⁵⁾ ②…認められた

「～ている」の「～られている」のように、「～られた」のような表現があるが、「～て

15) 「みられた」が4例あるが、同じ論文の例である。

いる」のように多くは見られない。

2) ~なかった

[はじめに]：2例(11.8%)

①…ものにすぎなかった ②…扱い得なかった

[おわりに]：1例(4.4%)

①…見当たらなかった

3) その他、2例ずつある動詞

[はじめに]：0例

[おわりに]：提案した、確認した、考えた

4) その他、1例ずつある動詞

[はじめに]：述べた、見た、考察した、検討した、指摘した、除外した、含めた、利用した、用いた、分析した、分けた、まとめた

[おわりに]：述べた、見た、議論した、概観した、記した、示した、当てた、辿った、改変した、変わった、確認できた

このような表現は、特に断定の表現として、注意されたい。

5. おわりに

本稿は、学術論文の[はじめに]と[おわりに]とでは、どのような文末表現が使われているのかを考察し、その表現を幅広く提示することを目的とした。従来「です/ます」体と対立する常体としての「だ」体と「である」体との関わりにおいてのみ分析されたことに疑問を持ち、より細分化した考察を通して、学術論文の文末表現の特徴をつかもうとしたものである。

文末表現に関しては、「だ」体と「である」体の混用の問題や時代的变化の問題などが取り上げられてきた。最近の研究のなかで、大野(2010)は、社説の文体は「である」体から「だ」体へと変化してきたと分析している¹⁶⁾。さらに論文や事務的文書などでは「である」体が多く使われるだろうと思われるとし、この際に、「だ」体に属するとしている「だろう」と「だった」は以外と現われるのではないかと予想している。ところが、本稿で[はじめに]と[おわりに]の文末表現を考察した結果、「だろう」は1、2例しか見受けられ

16) 大野早苗(2010)「社説の文体—デアル体からダ体へ」『表現研究』第91号、pp.1-10、表現学会

なかったし、「だった」は1例もなかった。これに関しては、卓(2002)でも似たような結果を示しているので、[はじめに]と[おわりに]のみを考察した限界とは言えないであろう。

少し観点は変わるが、大野(2010)の研究において、ダ体とデアル体に焦点を当てての社説の文末表現についての先行研究が見当たらなかったとしている。韓国語で書かれた論文はあったのにもかかわらず、参考にされることができなかつたのは残念でならない。文末表現に限らず、日本語学のあらゆる分野において、興味深い内容を扱っているにも関わらず、韓国語で書かれているため注目されない例は多々ある。日本語学に関わる論文は日本語で書かれた方がより多くの研究者の目に触られ、参考になれ、役に立てるだろうと思うのである。

筆者の経験からみると、大学院生でない限り学部生が日本語で書かれている学術論文を読むことはあまりないようである。しかし、「論文」の表現を書くためには、まず論文をよむことから始めなければならないし、その際の準備作業として本稿のような表現のリストが役に立てればと願うのである。もちろん、本稿の表現のリストは、論文の作成により発揮されると思われるが、まずは論文の読解にも役に立ててほしい。

今後の課題として、「～と言えるのではないかと思うのである」というようないわゆる「言い回し」の表現も考察してみたい。本稿では、文末表現(この例では「～である」)の前に接している表現(この例では「の」)まで考察したが、その前(この例では、「～と言えるのではないかと思う」)にも分析の範囲をひろげることにはしたい。また途中少し触れたが、例えば「考察する」の意味を表すために「考察を進める」のような様々な表現が使われることなどにも注目してみたい。つまり、学術論文の文末表現について「意味」の側面からより考察を深めたいのである。

【参考文献】

- 탁성숙(2002) 『문말표현에 관한 연구』 보고서
 石黒圭(2007) 『文章表現の技術V—文体編』 明治書院。
 大野早苗(2010) 「社説の文体—デアル体からダ体へ」 『表現研究』 第91号、pp.1-10、
 表現学会
 加藤泰彦、福地務(1989) 『テンス・アスペクト・ムード』 荒竹出版、p.53
 北川千里、井口厚夫(1988) 『助動詞』 荒竹出版。
 国立国語研究所(1985) 『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』 秀英出版。
 名柄すすむ、茅野直子(1989) 『文体』 荒竹出版。

要 旨

本稿は、学術論文にはどのような文末表現が多く使われているのかを、「はじめに」などの導入の章や「おわりに」などのしめくりの章において考察したものである。文末表現を考察する際に、その前に接続されている表現までを視野にいれ、作文教育など、より実用的に役に立てるような表現リストを提示しようと試みた。

学術論文の「はじめに」と「おわりに」とに多く現われる文末表現としては、「～である」「動詞の基本形」「～ている」「～れる/られる」「～た」「～がある」「たい」「ない」などが挙げられる。そこで、上位5位までの文末表現について、どのような表現が前に来ているのかなど、形態に注目してより詳細に考察した。表現によっては、「はじめに」と「おわりに」とで、現われる様相が異なる場合もあり、その理由なども考えてみた。このようなことも含めて、論文の作成に参考にできるだろうと期待する。

今後の課題として、今回取り上げることができなかった表現や、文末表現の「言い回し」、また意味の類似した多様な文末表現に焦点を当ててみたい。

キーワード：文末表現、学術論文の表現、である、る(基本型)、れる/られる、た、ている、作文教育

투 고 : 2011. 5. 31
1차 심사 : 2011. 6. 11
2차 심사 : 2011. 6. 25